

財閥の栄華を示すシンボルだった

## 北海道知事公館

三井財閥の迎賓館であった知事公館を紹介し  
ます。

知事公館が立つ一帯は、かつて一面の桑畑が広がっていました。そこが明治二十五年（一八九二年）に分譲され、開拓使の吏員として札幌農学校の校長などを務めた森源三が、現在の知事公館の敷地部分を購入し、私邸を建設しました。その後、森が亡くなると、大正四年（一九一五年）になって、三井合名会社がい取りました。

当時の三井財閥は、各地に集会所を所有しており、迎賓館としても使っていました。森の屋敷も補修・改築した上で、そんな集会所の一つに加えられ、「三井クラブ」や「三井別邸」と呼ばれるようになります。さらに昭和十一年には新館が建設され、この建物が後の知事公館となります。

三井クラブは、関連企業の重役や、皇族など賓客の宿泊所として使われていましたが、実際に利用さ

れるのは、年に数回だけ。しかし、そのために管理人や料理人など十人前後が勤務していました。まさに、限られた人たちのための特別な施設だったのです。

ところが、その華麗な歴史は、戦争の終結とともに終わりを告げます。米軍に接収され、その幹部の宿舍となったのです。二十七年に接収が解除されると、札幌市が三井から譲り受け、その後、市と北海道との土地交換で道の所有となりました。以後、知事公館として、再び賓客の接待や会議などに使われています。ただし、かつてのような容易に立ち入れない特別な場所ではなく、一部は市民が自由に訪れ、憩える場所に生まれ変わったのです。



「北海道知事公館」

（平成十四年十月号・第八十五回）